

改訂の序

本書はバイオ実験に必要な試薬調製法を系統的に網羅した試薬調製プロトコル本で、初版「バイオ試薬調製ポケットマニュアル」を刷新したアップデート版である。

「キット化・マニュアル化された時代だからこそこのような書籍を」と考えて初版本を世に送ったのは2003年末のことであった。それから10年以上、バイオ実験におけるキット化の比率はますます増えてはいるが、試薬調製の必要性が減ることはなく、依然として多くの試薬・溶液の自作は実験の基本となっている。新しい実験法や個別の実験条件をとるときは、試薬調製は避けて通ることができない。試薬を自作することによって溶液の機能や個々の成分の特性が理解でき、それが実験結果の正しい評価にもつながるため、試薬調製の意義は論を待たないだろう。何よりも簡単につくれる試薬溶液を購入することは不経済である。初版では115種類の試薬をカバーしていたが、本書では編集を工夫し、初版の項目をほぼ残したうえで新しい試薬を23種類増やしたが、そこでは初版で手薄と指摘された細胞実験などの分野に関して充実を図った。Ⅰ部に溶液・試薬データ編、Ⅱ部に基本操作編を置くという構成を含め、全体を通しての掲載スタイルはすべて本書に引き継がれている。

好評を得て毎年のように増刷を重ね、試薬調製本の定番となることができた初版であったが、今回の改訂作業により、本書は初版にも増して使える実用の1冊になったのではないかと自負している。初版同様に本書が実験する者の必携の1冊となり、バイオ研究の発展の一助になればと願うばかりである。最後に本書作成に協力していただいた石川裕之博士と、改訂の企画と製作を担当していただいた羊土社編集部の冨塚達也、吉田雅博の両氏に、この場を借りてお礼申し上げます。

2014年6月

深緑に紫陽花が映える西千葉の杜にて
田村隆明